

# 謝冰心と家塾

萩野脩二

## Xie Bingxin and Private Schools

HAGINO Shuji

Xie Bingxin (1900–99) spent her childhood in Yantai of Shandong province between 1903 and 1911. Her elementary education began in this Yantai period when Bingxin learned how to read with cards from her mother. Although her grandfather owned a private school in Fuzhou, Bingxin never went to such a kind which was a popular educational institution at that time. Instead, he preferred to play outside. Besides, Bingxin's father instructed her shooting and horse riding.

The educational system of late Qing China as well as culture, custom, and tradition, particularly in the provinces of Fujian, Zhejiang, and Jiangsu, is mentioned in *Shinzoku Kibun* 清俗紀聞. Dated in the Edo period, the book is based on fact-facing information offered by Chinese people who resided in Nagasaki, a Japan's only opening port at that time.

According to the book, literate education was provided both for boys and girls from four and five year olds. Getting around ten years old, boys moved to prepare for civil service examinations whereas girls were required to stay at home to do housework including sewing and embroidering. Such circumstances is also referred in Feng Youlan's *San song tang zi xu* 三松堂自序. Private schools in late Qing China educated children with textbooks including *Qianziwen* 千字文 and *Baijiaxing* 百家姓 as well as *Nü si shu* 女四書, *Xiaojing* 孝經, and *Lie nü zhuan* 烈女伝. The biography of Huang Luyin, Bingxin's contemporary female novelist, and Ba Jin's novel *Chūn* 春, also refer to these books. It shows that the educational system of Qing China reinforced feudalism by educating girls with textbooks such as *Nü si shu* 女四書.

However, the 1911 Revolution rapidly encouraged educational reforms for modern institutionalisation that gradually faded the tradition of private schools.

Bingxin experienced pre-modern elementary education on the basis of the feudal policy before the Revolution. In other words, her lived her childhood in a turning point to a new era.

## はじめに

この小論は、2008年8月2日に煙台で開かれた「冰心与煙台——冰心文学第3届国際学術研討会」で発表した私の「冰心与煙台」に基づいている。ここでは謝冰心がどのように煙台で過ごしたかを考察し、それが作家・謝冰心にどのように影響したかについて論じた。また、同年11月29日に第2回関西大学中国文学会が関西大学文学部で開かれ、私はそこで「伝統への一考察——謝冰心の場合」という講演をした。この講演も、煙台での発表を基にしたものであった。しかし、発表時間の関係から十分に意を伝えることができなかつたので、再度まとめて圧縮したものが、この小論である。煙台での発表では謝冰心の幼少年時代をまとめただけであったが、第2回の中国文学会では、『清俗紀聞』という資料により、謝冰心の故郷である福建などで行なわれていた伝統的な家塾に注目した。

今ここでは、謝冰心の家塾の対する対応をたどりつつ、その家塾で女子に教授されていた「女四書」などが、いわゆる伝統なるものの内実であったことを明らかにしたい。

## 1. 童年時代

謝冰心は、いわゆる良妻賢母を標榜する女性作家として、現在ではあまり好意を以って受け容れられていない。謝冰心は自ら署名として“冰心”と使用しているので、以下、謝冰心ではなく、また本名の謝婉瑩でもなく、冰心と言うことにする。

冰心は1900年・光緒26年10月5日に生まれた。旧暦では8月12日ということになる。1999年2月28日に亡くなっているため、98歳まで生きたことになる。

冰心が生まれたのは福建の福州府の近くの侯官県という所である。現在は福州市に併合されている。父親・謝葆璋（鏡如、1865～1940）が山東の芝罘（現在の煙台）に新たに設置された海軍練營の營長（のち海軍学校校長）となったために、家族とともに冰心も上海を経て煙台に移った。1903（光緒29）年の冰心が数え年3歳の時である。（以下、年齢は数え年である）。冰心は煙台には1911（宣統3）年の11歳まで住んでいた。冰心は煙台に住んでいたとき、すなわ

ち、3歳から11歳までの時期を「童年」時代としている<sup>1)</sup>。

冰心は煙台に移って、早速母親・楊福慈（1870～1931）から字を覚えさせられている。

虽然从四岁起，便跟着母亲认字片，对于文字，我却不发生兴趣。还记得有一次，母亲关我在屋，教我认字，我却挣扎着要出去。父亲便在外面，用马鞭子重重地敲着堂屋的桌子，吓唬我。可是从未打到过我头上的马鞭子，也从未把我爱跑的瘴气吓唬回去。<sup>2)</sup>

ここに書いてあるように、冰心は数え年4歳から「字片」（カード）で文字を教わったが、少しも興味を示さなかったと言う。すぐ外に出て遊びたがったのであろう。母親は冰心を閉じ込め、父親が外で鞭を鳴らして脅かしたと言う。冰心の場合はまだ小さい女の子であったので、父親が部屋の外で鞭で脅かすだけで、体罰には至らなかった。塾に入った子供への刑罰としては、「戒尺」（厚さ約6ミリ、長さ1メートル弱の竹切れ）で手のひらや尻を打つのが一般的であった。

たとえば、陳独秀（実庵、1879～1942）の思い出を見てみると、次のようなことが出てくる。

我从六岁到八九岁，都是这位祖父教我读书。我从小有点小聪明，可是这点小聪明却害苦了我。我大哥的读书，他从来不大注意，独独看中了我，恨不得我一年之中把四书五经都读完，他才称意，四书诗经还罢了，我最怕是左传，幸亏这位祖父或者还不知道三礼的重要，否则会送掉我的小性命。我背书背不出，使他生气动手打，还是小事；使他最生气，气得怒目切齿几乎发狂令人可怕的，是我无论挨了如何毒打，总一声不哭，他不只一次愤怒而伤感的骂道：「这个小东西，将来长大成人，必定是一个杀人不眨眼的凶恶强盗，真是家门不幸！」<sup>3)</sup>

のちに中国共産党の初代総書記になった陳独秀は、お祖父さんに聡明さを見出されて、小さい頃、厳しく指導された。暗誦できないと打たれたとある。時には「毒打」（ひどく打つ）されたらしいが、どんなに打たれても泣かなかったとある。

このように、教育には罰が伴うものであったろう。中華民国以前の中国で、いかなる児童教育がなされているかについては、田中謙二「旧支那に於ける児童の学塾生活」<sup>4)</sup>が詳しい。ただ、

---

1) 冰心には「我的童年」と題する散文が、1942年と1979年の2篇あるが、この言い方により煙台にいた時期を「童年」時代として捉えていることがわかる。どちらも卓如編『冰心全集』9巻本（海峡出版社1999年4月）第3巻と第7巻に収録されている。なお、以後の冰心の文章はこの『冰心全集』より引用し、全集とのみ言う。

2) 冰心「我的文学生活」1932年清明節（全集3巻 5頁）下線は引用者。以下同じで、いちいち断らない。

3) 陳独秀『実庵自伝』（伝記文学叢書之20、伝記文学出版社 民国56年9月1日）26頁

4) 田中謙二「旧支那に於ける児童の学塾生活」は、最初は『東方学報』（京都）1946年1月に発表されたが、今は『田中謙二著作集』（汲古書院 平成12年10月18日）第2巻に収められている。この件につ

田中謙二博士は専ら男子の教育だけに関心があり、女子の教育には殆どふれていない。そこで、女子の教育に目を向けて冰心の煙台時期、すなわち「童年」時代を見てみたい。

冰心が煙台でどのように勉強したか、冰心の回想文からいくつかを拾い上げてみる。

这时，认字读书已成了我的日课，母亲和舅舅都是我的老师，母亲教我认“字片”，舅舅教我的课本，是商务印书馆的国文教科书第1册，从“天地日月”学起。有了海和山作我的活动场地，我对于认字，就没有了兴趣，<sup>5)</sup>

これは、先ほどの文字を習ったと言う回想と同じだが、1979年というずっと後から書かれた回想なので整理されて、冰心が5，6歳になってから教わった「舅舅」（おじさん＝ここでは楊子敬）も一緒に挙げられている。別の冰心の文章にもあるように、楊子敬は冰心の母親が次の子を妊娠して冰心に字を教えられなくなってから煙台に来て教えることになったのである<sup>6)</sup>。

また、「商務印書館」から出た「国文教科書」第1冊は1904（光緒30）年に中国で最初に出版された教科書であったから、4歳で煙台の冰心が使用するには少し早すぎるであろう。ここに言う「字片」は、先ほどのカードで字を覚えることであるが、たとえば胡適も次のような体験を語っている。

我小时也很得我父亲钟爱，不满三岁时，他就把教我母亲的红纸方字教我认。<sup>7)</sup>

このように、胡適は「紅紙方字」（赤い四角の紙に書いた漢字）で父親から3歳に満たぬ時に文字を教わったのである。現在でも、裏にピンインを書いた漢字カード等が市販されている。

就在这个期间，1906年，我的大弟谢为涵出世了。他比我小得多，在家塾里的表哥哥和堂哥哥们又比我大得多；他们和我玩不到一块儿，这就造成了我在山颠水涯独往独来的性格。这是我和父亲同在的时间特别多。白天我开始在家塾里附学，念一点书，学作一些短句子，放了学父亲也从营里回来，他就教我打枪、骑马、划船，夜里就指点我看星星。<sup>8)</sup>

ここで、冰心は家塾のことに触れている。そこでは母方や父方のいとも一緒に勉強していたことがわかる。しかし、どうも冰心は塾での勉強よりも父親から教わる乗馬だとか銃の打ち方のほうを好んだおてんば娘であった。そうして、こういう父親への親愛の情はかなり深いも

いては、坂出祥伸・関西大学名誉教授に教示を受けた。記して謝意を表する。

5) 冰心「我的童年」1979年7月4日（全集7巻 68頁）

6) 同注2「我的文学生活」5頁に、“那时我已认得二三百个字，我的大弟弟已经出世，我的老师，已不是母亲，而是我的舅舅——杨子敬先生——了。”とある。

7) 胡適「九年的家郷教育」二（『四十自述』中国現代文学参考資料 上海書店影印出版 1987年2月）33頁

8) 同注5「我的童年」70頁

のがあったであろうし、父親からしても、夜には星を指差して教えているところなどから娘への愛情を感じることができる<sup>9)</sup>。

这座练营里已住进了一批新招来的海军学生，但也住有一营（？）练勇（大概那时父亲也兼任练营的营长）。我常常跑到营口门去和站岗的练勇谈话。——（略）——写到这里，我觉得我渐渐地进入了角色！这营房、旗台、炮台、码头，和周围的海边山上，是我童年初期活动的舞台。<sup>10)</sup>

ここでは冰心は練勇（=水兵）とよく話をしたと言っている。そして自分の活動の舞台は、兵舎、旗台、砲台、波止場、そして海や山であったとも言っている。これらが冰心の「童年」の舞台であった。つまり、お友達がいなかったのである。水兵や父親はいたかもしれないが、少なくとも女の子の友達がいなかったのである。

そして、これらは、冰心自身が述べるように、所謂女の子らしい、きれいな着物や飾り物などに特別な関心を示さなかったこと、つまり、おとなしく家に引きこもって、刺繍などを手にしなかったことも意味している。

环境把童年的我，造成一个“野孩子”，丝毫没有少女的气息。我们的家，总是住进海军兵营，或海军学校。四围没有和我同年龄的女伴，我没有玩过“娃娃”，没有学过针线，没有搽过脂粉，没有穿过鲜艳的衣服，没有戴过花。<sup>11)</sup>

「まるで少女っ気がなかった」と言っている。「娃娃」（お人形さん）と遊んだり、針と糸を学ばなかったし、白粉もつけねば、きれいな着物も着なかった上、花も挿して飾らなかったのであった。冰心は普通の女の子ではなかったというわけである。

こういう子供を称して「野孩子」というのであろう。「野ye」なのである。母親はそれを心配していた。

当我连蹦带跳地从屋外跑进来的时候，母亲总是笑骂着说，“看你的脸都晒‘熟’了！

一个女孩子这么‘野’，大了怎么办？”跟在我后面的父亲就会笑着回答，“你的孩子，大了还会野吗？”这时，母亲脸上的笑，是无可奈何的笑，而父亲脸上的笑，却是得意的笑。<sup>12)</sup>

ここで言っている「野」は、野性的で、少しも女の子らしくないことを言っているにちがいない。

また、冰心はこんなことも言っている。

9) 父親への愛情の一端は、詩集『繁星』（商務印書館 1923年1月）に見ることが出来る。

10) 同注5「我的童年」69頁

11) 冰心「我的童年」1942年3月27日（全集7巻 236頁）

12) 冰心「童年雜憶」1981年4月（全集7巻、224頁）

的确，我的“野”，是父亲一手“惯”出来的，一手训练出来的。因为我从小男装，连穿耳都没有穿过。记得我回福州的那一年，脱下男装后，我的伯母，叔母都说“四妹（我在大家庭姐妹中排行第四）该扎耳朵眼，戴耳环了。”父亲还是不同意，借口说“你们看她左耳唇后面，又一颗聪明痣。把这颗痣扎穿了，孩子就笨了。”我自己看不见我在左耳唇后面的小黑痣，但是我至终没有扎上耳朵眼！

不但此也，连紧鞋父亲也不让穿，有时我穿的鞋稍为紧了一点，我就故意在父亲面前一瘸一拐地走，父亲就埋怨母亲说，“你又给她小鞋穿了！”母亲也气了，就把剪刀和纸裁的鞋样推到父亲面前说“你会做，就给她做，将来长出一对金刚脚，我也不管！”父亲真的拿起剪刀和纸就要铰个鞋样，母亲反而笑了，把剪刀夺了过去。<sup>13)</sup>

冰心は小さい頃、ちょうど煙台にいる頃は男装をしていたことがわかる。それゆえ、女の子がするような耳飾やピアスもしていなかった。さらに、纏足もしていなかった。これらはすべて、父親が冰心を「慣」（甘やかす）ことからきていたと書いてあるが、耳飾を強要するおばさんたちへの父親の反論のことは、「耳の後ろにある痣に穴を開けたら、この子はバカになってしまう」だとか、冰心の靴を実際にハサミを持って作ろうとするところなどに見られるように、父親・謝葆璋には確固たる開明的な考えと、それを実践する行動力があつたことを示していよう。先に挙げたように、冰心に昼は鉄砲の打ち方を教え、馬に乗せ、舟をこいだ。夜になれば星を指差して星座を教えたと言ふところなどに、父親の冰心に対する並々ならぬ愛情を感じる。さぞかし、父親からすれば冰心が男の子であつたらばと思つたに違いない。

ここで少し父親について触れよう。

## 2. 父親

福建省福州のすぐそばの侯官県で生まれた冰心が山東省の煙台に行ったのは、父親である謝葆璋が1903（光緒29）年清朝の海軍学校の校長になつたからである<sup>14)</sup>。

謝葆璋は清朝の天津水師学堂の教師であつた嚴復（幼陵、また幾道、1853～1921）に見出されて海軍に入った。『天演論』の翻訳で有名な嚴復も同じ福建省侯官県出身だったので、冰心の祖父に当たる謝鑿恩（子修、1834～1921）と親しかつた。福建と海軍の結びつきは1868（同治7）年に福州船政学堂が出来てから緊密になつていた。1881（光緒7）年に李鴻章（少筌、

13) 同注12「童年雜憶」224～225頁

14) 父親については、拙著「冰心の父親について」（関西大学文学部中国語中国文学科編『文化事象としての中国』関大出版局、2002年3月所収）及び、拙著「冰心の父親について——その2」（関西大学文学部『文学論集』第51巻第4号（2002年3月）を参照されたい。

1823～1901) が天津水師学堂を作って北洋艦隊の人材を集めたので、その教官であった嚴復は学生募集に来て、謝葆璋を採用した。もちろん試験はした。詩の題「月到中秋分外明」を出して詩を作らせたのと、八股文の最初の2句を出し、決まった言い方を続けさせる「破題」であった。謝葆璋は見事この嚴復の出した試験に合格した。こうして、謝葆璋など30人が天津水師学堂の第1期駕駛班（航海術クラス）の学生となった。謝葆璋は3年後の1884（光緒10）年に1番の成績で学習を修了し、練習艦「威遠」で実習することになった。この「威遠」の艦長であったのが同じ福建出身の薩鎮冰（鼎銘、1859～1952）であった。以後、薩鎮冰と謝葆璋とのつながりは続く<sup>15)</sup>。

ついでに言って置くと、福建の人間が如何に海軍で多かったかは、次の表でわらう。

表1 1922年(民国11年)3月の「海軍部職員録」による、職員の出身地の割合

単位	総人数 (名)	福建省		福建の内訳			広東省
		人数(名)	占有率	閩侯	長楽	その他	
総長 李鼎新	1	1	100%	1	0	0	0
次長 徐振鵬	1	0	0%	0	0	0	1
参事庁	14	1	7%	1	0	0	0
総務庁	74	39	53%	32	5	2	5
軍衡司	39	19	49%	17	1	1	1
軍務司	50	22	44%	19	3	0	4
軍戒司	49	9	18%	8	0	1	4
軍学司	56	20	36%	14	4	2	2
軍需司	52	28	54%	21	6	1	2
軍法司	31	22	71%	19	1	2	0
校正室	11	8	73%	8	0	0	0
陸海軍会 計審査処	29	18	62%	16	1	1	0
海軍陸戦隊	15	8	53%	8	0	0	0
合計	422名	194名	46%	163名 (39%)	21名	10名	18名 (4%)

この表は私が1922（民国11）年3月の「海軍部職員録」によって、作成したものである。すでに中華民国になっている資料であり、清国の北洋海軍ではないが、海軍における傾向がわかるであろう。職員総人数422名のうち、福建省の人間は194名で全体の46%を占めていたのである。当時は広東省の人間が多く、福建の人間と張り合っていたが、それでも18人で4%に過ぎ

15) 薩鎮冰と謝葆璋とのつながりは、以後、民国になっても続き、謝葆璋は薩鎮冰の下で働いている。注14の拙著を参照されたい。

なかった。海軍のうち、福建省と広東省とで50%を占めているのである。さらに同じ福建省194名の中でも163名（84%）が閩侯県の出身者であった。

この福建省の人間が多いという傾向は煙台の海軍学校でも同じであり、煙台のある山東省出身の者との間に、出世・留学などの面で軋轢を生んでいた<sup>16)</sup>。

さて、謝葆璋の先祖はどうであったかという、確実なことは冰心の曾祖父の代（3代）まで遡れる。曾祖父・謝以達は福建省長楽県横嶺郷から天災で福州に逃げてきて<sup>17)</sup>、福州で裁縫をやり始めた。しかし、謝以達は字が読めず書けなかったので、盆暮れの掛取りの際代金を1銭も取り戻せなかったことがあった。生活を悲観した妻が自殺を図った。そこで、男の子が生まれたらきっと読み書きが出来るように育てようと、奇跡的に助かった妻と誓いあったという。ところが続けて生まれた4人とも女の子であった。5人目にやっと男の子が生まれた。それが謝鑾恩、冰心の祖父である。謝鑾恩は福州の侯官県で私塾を開いたという。門下生が延べ500人はいたというから、かなりはやった塾であったと言える。祖父・謝鑾恩は読書人に入るにちがいない。冰心自身も次のように言っている。

我的祖父谢子修（鑾恩）老先生，是个教书匠，在城内的道南祠授徒为业。他是我们谢家第一个读书识字的人。<sup>18)</sup>

しかし、謝鑾恩は科挙に合格したわけではない。祖父が科挙に合格していなかったわけだから、謝の家はそんなにたいした大きな家、地位身分のある家ではなかったということになる。また、せいぜいが冰心の祖父・謝鑾恩から読書人というわけだから、伝統のある家というわけではなかったといえるかもしれない。ただ、謝鑾恩は翻訳家として有名な林紓（琴南、1852～1924）や思想家の嚴復などと交わり、詩を作ったりしている。その詩作は一部残っている。

冰心の家はこのように三代先まで遡れるが、それほどの大家ではなかった。但し、祖父の代から読書人の一端を担うようになり、その息子にも家塾で教育したのかもしれない。そういう素地があったから、嚴復の試験にもすぐ合格したのかもしれない。

冰心の父親は海軍学校の校長になった。文官に対する武官になったと言っても良いだろう。福建の土地柄からして、海軍に入ることは、けっして異常なことではなく、ごく普通のこと、むしろ当たり前な出世コースであったことは先ほどの表でもわかるにちがいない。謝葆璋は優

16) 注14に挙げた拙著「冰心の父親について——その2」を参照されたい。

17) 冰心の先祖のことは、主に冰心の「我的故郷」1979年2月11日（全集7巻 13～20頁）によっている。以下、いちいち断らない。

18) 同注17「我的故郷」13頁



秀な成績で卒業し、その後、イギリスなども訪問しているから、かなり広い新しい知識を体得していたに違いない。謝葆璋は、中華民国になってからも順調に出世したのである<sup>19)</sup>。

### 3. 『清俗紀聞』

さて、冰心の生地・福州での児童はどのように教育されていたのかについて、閩浙方面（福建や浙江方面）の風俗習慣を調べた資料である中川忠英による『清俗紀聞』を見てみよう。

『清俗紀聞』は江戸時代の寛政年間（18世紀の90年代）に長崎奉行を勤めた中川忠英が監修者となって、中国清朝乾隆時代（1736～1795）ごろの福建・浙江・江蘇地方の風俗慣行文物を、近藤重蔵ら海外事情調査に長けた幕吏が、長崎の唐通事を動員して、長崎に渡来した清国商人から問いただし、具体的な絵図をつくり和漢混交文で解説した調査記録である<sup>20)</sup>。

『清俗紀聞』は著者として中川忠英（1753～1830）の名前を冠しているが、実際は、「海外事情に長けた」近藤重蔵（1771～1829）らによって調査されたことがわかる。清朝乾隆時代の資料なので、冰心の祖父たちが生きた清末より数えても100年ほど前になるが、ただし内容としてはそんなに変化がないであろうと思われる風俗慣行事物なので、参考になると言える。

その巻の5「閩学」には、次のように述べられている。なお、かなづかいは編者によって「現代かなづかい」に改められている。

閩学（りょがく）<sup>リイヤ</sup>というは、一郷（いっきょう）のうちに館を設け郷党の子弟を教授する所にして、先生はもとより無位無官の人なり。我が家または居宅手狭き時は宅借（たくが）<sup>キョウダウ</sup>りをして書生を集め教導（おしえみちびく）<sup>ヤクワン</sup>す。この所を学館という。<sup>21)</sup>

この『清俗紀聞』には、このように読みが振ってあり（カタカナの部分）、それが当時の発音の資料として貴重だが、ここではそれについては触れない。

およそ男子五六歳にもなれば天質（むまれつき）<sup>テンチ</sup>を見て、聡明（そうめい）<sup>ツワンミン</sup>なる子は五歳六歳または生質（むまれつき）<sup>キイテツ</sup>により八歳にても学館に入り、句読を授かる事なり。皆人々の生まれ付きによれり。<sup>22)</sup>

とある。すなわち一郷の内に学館を設けてそこに子弟を入れるわけである。そして、優れたものは5,6歳（数え年）から学館に入って勉強するとあり、遅くても8歳ぐらいには入るわ

19) 謝葆璋は、民国2（1913）年8月には、海軍少将に、10月には軍学司司長（=局長）になった。1926年には61歳で海軍次長となった。

20) 村松一弥「解説」（『清俗紀聞』I（平凡社、昭和41年3月10日）127頁

21) 『清俗紀聞』II（平凡社、昭和41年7月10日）37頁。下線は引用者。以下同じで、いちいち断らない。

22) 同注21 37頁

けであるから、大体今の学校制度とそんなに変わりはないように見える<sup>23)</sup>。

「先生はもとより無位無官の人なり」とあるのは、冰心の祖父・謝鑾恩が私塾の先生であったのとぴったりあてはまる。彼はここで言う「学館」(ヤクワン)の先生であったのだ。

そのほかにも巻の2の子供の教育のところでも次のように述べられている。

男子(なんし)四、五歳、五、六歳になれば書法を教え読書せしめ、女子(じょし)は針線(しんせん、ぬいはり)第一として教え、なかにも女に書法(しょほう)を教え読書詩作等せさする者あり。書法は男女(なんによ)ともに楷書より教ゆるなり。そうじて書法読書の師は、有力の家は家内(かない)に館を設け師伝を受くることあり。この先生をメンクワンセンセン門館先生という。

家内に師を請(しょう)ずるほどの力なき者は寺院に館を設け、日々(ひび)家内より往来して書法を学び読書等せしむ。もともと女は外館(がいかん)に出(いで)て読書等することたえてなし。<sup>24)</sup>

やはり、5,6歳が入学の時期である。習字と読書(主に本文の暗誦であった)をするのだが、それは男子の場合で、女子についてはお針と糸が主であった。例外的に習字や読書そして詩作を教えることがあったとある。冰心はまさに例外的であったのである。女子は家の外に出て行って学習することはなかったとも書いてある。

女子の学問については、巻の5の「閩学」でこう述べている。

女子(じょし)の学問の法は男子に異(かわ)る事なし。しかもニイセンセンクワフー女先生と寡婦または人の妻(さい)学才あるもの、諸家(しょけ)の女子を教ゆるなり。日々女子の家に來たりて教授す。初めにはニイヒン ヒキウキン「女訓」「孝経」を教え、後には「千字文(せんじもん)」「百家姓」、四書等を読みしむる事男子(なんし)に同じ。ツウイーソスウ贊儀東脩の礼も同様なり。習字も初めは女先生の教えにて、「上(じょう)大人(じん)」を習う。後には男女(なんによ)に限らず能書の先生を頼み習う。かつ豪家(か)の女子には詩、文章を教ゆるもあり。小家にても志厚さかまたはその父母の好みにて詩作等教ゆるなり。このほか女(じょ)先生、女子に教ゆる事なし。エンワン テンツン婉婉(しとやか)聴従等の事は、女子の母常々おしゆるなり。折々は女先生もおしゆる事なり。<sup>25)</sup>

女先生というのがいて、女子の家に來て、「女訓」「孝経」を教えたり、後には「千字文」「百

23) 注4にふれた田中謙二論文には、魯迅7歳、胡適3歳数ヶ月、郭沫若4歳半、陳独秀6歳、張資平5歳、王独清4歳、郁達夫7,8歳、陳鶴琴8歳、沈從文6歳と言う。下線は実齡と言う。

24) 同注20 90頁

25) 同注20 49頁

家姓)、四書等を読ませたとある。女先生というのは、寡婦の者か学才ある人妻がなるようだ。女子は原則として外を出歩けないので、女先生が家に来て「女訓」とか「孝経」を教えたりしたという。

ここに言う「千字文」は“天地玄黄”から“焉哉乎也”まで、4字を1句とする250個の短句からなる韻文である。全て違った文字で、一字も重複していないので、字を覚え習字の練習として昔から使われた。南朝の梁(502~549)の武帝が、周興嗣(470~521)に作らせたという。周興嗣は一晚で「千字文」を作ったので髪が真っ白になったといわれている。文字を東晋(317~419)の王羲之(303~379)の文字を真似して殷鉄石に作らせたという。

「百家姓」は、「趙、錢、孫、李。周、呉、鄭、王。馮、陳、諸、衛。蔣、沈、韓、楊。」と始まる、姓を4字句にしたものである。北宋の初めに411個が集められ、そのご504個に増補されたという。文字の異同等が多いが、大体単姓が444個、復姓が60個ほど収められている。人口が多い順で並べられたわけではない<sup>26)</sup>。

四書については言うまでもなく、朱熹が『礼記』から「大学」と「中庸」を取り出し、それに『論語』と『孟子』をあわせて四書としたものだ。これを読めば儒教の真髓がわかるとされた。『孝経』についても、言うまでもなく親孝行の書物だが、『女訓』というのはあとでふれることにする。

『清俗紀聞』の巻の7「冠礼」の女子作法では、また次のようにも言っている。

女子(じょし)は専ら母の手もとに置きて食事等の作法をおしゆる事、男子とかわる事なし。五六歳になれば起居(たちい)の行儀(ぎょうぎ)諸礼を教えみだりにさわがしきことをいましめ、ことばやわからかに、心をすなおに持つ事をおしえ、十歳にもなればスイ繡花ホッア(ぬい)針工チンゴン(はりしごと)紡織ハンチ(おうみ・はたおり)の道を教導す。大戸(たいこ、おおぐらし)なれば衣服は多く縫匠ワンズヤン(したてや)を頼みて仕立てるゆえ、ただ貨包ホッハッ(きんちゃく)煙包(たばこいれ)等を縫う事をおしゆ。しかしその程々によりて、衣服の仕立てかたもおしえおくなり。

もし母親繡花(しゅうか)等の道をよくせざれば、近隣の婦人を請じ、あるいはスイニヤン繡娘(ぬいし、繡花を渡世にする婦人なり)などという類の人を呼び置きて習わしむ。また七八歳の頃より女(じょ)先生を煩わして写字(しゃじ、てならい)は勿論、読書(とくしょ)詩作等を教ゆる人も有り。十二三歳にもなれば閨門(けいもん、おくむき)を出(い)でて

26)『百家姓』の前の四姓(趙、錢、孫、李)は、宋朝の皇帝趙氏、呉越国の国王錢氏、正妃の孫氏、及び、南唐の国王李氏から来ているのだとする説が有力である。

人に見(まみ)ゆる事をゆるさず。多くは部屋を楼上(ろうじょう、にかい)に拵(こし)らえ門戸を構え出入りを厳にす。年頃にもなれば男女(なんによ)同席せず。煮焼きの事はその自然(しぜん、えて)にまかせて殊更(ことさら)におしゆる事なし。<sup>27)</sup>

大体において、豪家(か)とか大戸(たいこ)といわれる上流階級は先生を宿許に請じいれ、中通り(なかどおり)といわれる中流階級や小家は学館(閭学)に女子をおくり、至って貧なる者は義学につかわす、とある。このように貧富の差によって通学するところは変わるが、貧富に関わらず手習いは受けさせたのであった。さらに、今問題の女子教育においても、かなり早くから文字学問を教えられていたこと、以上からわかるのである。そして、正規な女子教育とは、立ち居振る舞い、礼儀作法などを仕込まれ、「みだりに騒がしきことをいましめ」るものであった。「心をすなおに持」ち、10歳になれば、刺繍や針仕事を習う。これが正規の女子教育であったのである。先に挙げた冰心の「野ye」ということが、如何に正規より逸脱したものであるかわかるであろう。

念のために、19世紀の後半から20世紀初め(清末)についての証言を見ておく。それは、馮友蘭(1895~1990)という北京大学の哲学の先生であった人の言である。『三松堂自序』に、次のように書かれている。

照这个大家庭的规矩，男孩子从七岁起上学，家里请一个先生，叫这些孩子读书。女孩子七岁以后，也同男孩子一起上学，过了十岁就不上学了。在我上学的时候，学生有七，八个人，都是我的堂兄弟和表兄弟。我们先读《三字经》，再读《论语》，接着读《孟子》，最后读《大学》和《中庸》。一本书必须从头背到尾，才算读完，叫做〈包本〉。有些地方读〈四书〉不仅要背正文，还要背朱(熹)注，不过我们的家里没有这样要求。<sup>28)</sup>

このように、男も女も7歳になると一緒に家塾に上がり字を覚え、読書したとある。但し、10歳になると、女はもう塾には来なかったとも言っている。

馮友蘭は河南省の出身であるが、どうやら『清俗紀聞』の世界と違わないようである。女子も男子と変わらずに教養として、現在の初等教育のような教育がなされたのであった。それは古くからの伝統であり、ほとんど中国全土で行われていたと言っても良いようである。また、それを教える教養ある女性も存在していた。そして、それは道德教育として知育の面からなされ、『女訓書』が用いられたのであった。

冰心と同時期の女性作家として有名であった廬隱(1899~1934)という作家がいる。「海濱

27) 同注20 75頁

28) 馮友蘭『三松堂自序』(生活・読書・新知三聯書店、1984年12月)2~3頁。なお、馮友蘭著・吾妻重二訳注『馮友蘭自伝——中国現代哲学者の回想』1,2(平凡社東洋文庫、2007年10,11月)を参照した。

故人」などという短篇小説が有名である。廬隱は福建閩侯県の挙人である黄という姓の娘として生まれているので、黄廬隱とも言われる。

在文坛上，她与冰心同样享有盛名；但她与冰心绝对不同。她写的东西，充满了苦恼，忧郁，感伤；同时对社会的旧制度表示憎恨；尤其对于封建势力，她攻击得体无完肤；对于一般伪正人君子，假道学先生，也骂得狗血喷头。<sup>29)</sup>

廬隱はこのように、冰心と比べられる五四時期の女性作家だが、その特徴として、冰心と違い社会の旧制度に態度に対する憎悪が強かったと指摘されている。

その伝記に次のように出てくる。廬隱は、母親から嫌われ、愛情のない家庭に育った。勉強の方面も、彼女は中学校に入ってから頭角を現すが、それまでは出来の悪い、サボってばかりいる少女であった。

黄夫人在娘家找到了一个安静的归宿，按说小庐隐的生活也该从此安定了。然而这个天性向往自由的孩子，受不了传统旧思想的束缚，等待着她的，仍然是歧视和冷漠。在她七岁的那一年，她的只会念女四书一类东西的姨母，当上了她的启蒙老师，每天早晨，姨母把这种乏味的玩艺儿教给她一课，然后就把房门反锁上，让小庐隐独自去读。她象一个小囚徒似地，呆坐在那里，这样的功课对她毫无吸引力，她只得无聊地望望头上的天花板和包围着她的空空的四壁，心里感到了说不出的荒凉。<sup>30)</sup>

廬隱が7歳の時、女四書を知る「姨母」（おばさん、母の姉妹）が家庭教師としてやってきたという。おばさんは廬隱に女四書を1課ずつ暗誦するよう強制するのであった。暗誦できるまで一人部屋に閉じ込めるのが、教授法であった。ここで自然と冰心が部屋に閉じ込められて字を学ばされたという先に挙げた事例を思い出すが、またおばさんは、先に引用した『清俗紀聞』の女先生という寡婦の者か学才ある人妻というのに当たることにも思い至る。『清俗紀聞』の世界がかなり続いて残っていた例証となるに違いない。

また、女子には「女訓書」を用いて道徳面から教えたであろう例を、巴金（1904～2005）の『激流三部作』の1つ『春』という長篇小説に見ることが出来る。第4章で次のような会話が出てくる。

“……今早晨她（妈=引用者）睡在床上，又把我喊去，说不准我进书房读书了。她教我勤快地做针线、绣花……”（略）<sup>31)</sup>

これは、淑貞という10歳くらいの娘が年上で姉の世代に当たる琴たちに訴えている場面であ

29) 谢冰莹「黄庐隐」（肖凤『庐隐传』北京师范大学出版社1982年2月、所収）128頁

30) 肖凤著『庐隐传』（北京师范大学出版社 1982年2月）6頁

31) 巴金『春』（『巴金文集』5、人民文学出版社、1958年8月）62頁

る。「お母さんが、書齋に行って読書することを許さず、針仕事や刺繍に勤めるようにさせた」とある。まさに針仕事や刺繍が、先に述べた女子のやるべきことだったのである。しかし、書齋に先生が来て女子にも読書することを教えていたことも確かなことである。巴金が描いた四川省の大戸（大家族の家）の情況は、先に引用した『清俗紀聞』の世界とほとんど同じである。『春』という小説では、五四時期を経た新しい思想の娘（ここでは琴）たちは次のように言うのであった。

琴不等她（淑贞＝引用者）说完，就接口说道：“那也不要紧。横竖在书房里跟着那个冬烘先生读书也得不到什么有益的指示。你高兴读书，你二哥、二姐和我，我们都可以教你。这比在房里读《女四书》，《烈女传》之类强得多了。”<sup>32)</sup>

あんな「冬烘先生」つまり頭の古くて硬い先生から『女四書』や『烈女伝』なんか学んでもしょうがない、私たちが勉強を教えてあげると言うのである。このように、女子にはまず『女四書』を教えるのが常道であったようだ。

では、その『女四書』とはどんなものであるかということ、次のようになる。

『女四書』は明代に王晋升が編集したものとされている。

1. 西漢の班昭（曹大家）『訓誡』。
2. 唐朝 宋如華・宋如昭姐妹の『女論語』。
3. 明朝 仁孝文皇后の『内訓』。
4. 明朝 伝王節婦撰の『女範捷録』の4種をいう。

この4種を『女四書』といたり、『女訓書』といたりする。先の「女訓」である。

この中でも、『訓誡』あるいは『班昭女誡』とか『曹大家（たいこ）訓誡』などと言うが、それが最初に女の子が学ぶものであったので、少し考察しよう。

『班昭女誡』は：第一 卑弱，第二 夫婦，第三 敬慎，第四 婦行，第五 専心，第六 曲従，第七 和叔妹。の7章からなっている。

卑弱第一では、最初にこんなことが書かれている。

古者生女三日、臥之牀下、弄之瓦墼、而齋告焉。臥之牀下、明其卑弱、主下人也。弄之瓦墼、明其習勞、主執勤也。齋告先君、明当主継祭祀也。三者蓋女人之常道、礼法之典教矣。

（古者（いにしへ）女（むすめ）を生みて三日、之れを牀下に臥せしめ、之れに瓦墼を弄ばしめて、齋（きよ）め告ぐ。之れを牀下に臥せしめるは、其の卑弱にして、人に下（へ

---

32) 同注31 64頁

りくだるを主とするを明かにす。之れに瓦磚を弄ばしむるは、其の勞に習（な）れ、勤を執るを主とするを明かにす。斎（きよ）めて先君に告ぐるは、当（まさ）に祭祀を継ぐるを主とすべきを明かにす。三者は蓋し女人の常道、礼法の典教なり。）<sup>33)</sup>

後漢の班昭は、字は恵班。父は班彪、兄は班固、弟は班超という学者の家に生まれた。14歳で曹寿に嫁した。それで曹大家（たいこ）という。漢代の大儒・馬融が彼女を師として従った。

この『班昭女誡』に見られる「之れを牀下に臥せしめるは、其の卑弱にして、人に下（へりくだ）るを主とするを明かにす。」という思想は、明らかに封建的な男尊女卑の思考である。封建思想といわれるものは、このように『女四書』を教えることを通じて具体的に継承されたのである。このような性差による差別が女子の口から女子へ伝達されることについては、現在のフェミニズムの観点から研究がある<sup>34)</sup>。

今、以上のことから見られる女子教育についてまとめると、第1段階として、文字などを知らない段階、但し針仕事や刺繍などはしっかりやる段階がある。その次に第2段階として、家に来る先生に習って、『女四書』や『烈女伝』等を学ぶのであった。これが正規の女子が習う家塾の習わしであった。

そして、五四時期以後の新しい思想は、その『女四書』や『烈女伝』を攻撃することに始まった。旧制度旧習慣などの底に横たわる封建思想の具体的表現が、女子教育の現場における『女四書』などの教授であったわけである。

それはちょうど冰心の幼い時期、煙台にいた「童年」の時期と重なるのであった。

#### 4. 家塾への新しい風

先に例示したように冰心は文字に関心を示さず、海や水兵に関心があったように見える。しかし、それにもかかわらず、冰心が煙台で文字を習得し、文字に興味を持ったことは注目に値する。冰心は早くから廟にある対聯などに関心を示めている。ただ最初は母からの文字カードにもさして関心を示さなかったのだが、積極的に文字を覚えることになったのには次のようなことがあったからだともみずから書いている。

那时我已认得二三百个字，我的大弟弟已经出世，我的老师，已不是母亲，而是我的舅舅——杨子敬先生——了。舅舅知道我爱听故事，便应许在我每天功课做完，晚餐之后，给我讲故事。头一部书讲的，便是《三国志》。三国的故事比牛郎织女痛快得多。我听得晚上

33) 山崎純一著『教育からみた中国女性史資料の研究』（明治書院 昭和61年10月20日）84頁

34) 一例として、白水紀子『中国女性の20世紀——近現代家父長制研究』（明石書店 2001年4月1日）を挙げておく。

舍不得睡觉。每夜总是奶娘哄着，脱鞋解衣，哭着上床。白日的功课，却做得加倍勤奋。舅舅是有职务的人，公务一忙，讲书便常常中止。有时竟然间断了五六天。我便急得热锅上的蚂蚁一般。天天晚上，在舅舅的书桌边徘徊。然而舅舅并不接受我的暗示！至终我只得自己拿起《三国志》来看，那时我才七岁。<sup>35)</sup>

ここに書いてあるように、舅舅（おじさん）である楊子敬から話として『三国志』を聞いたことが氷心のモチベーションを掻き立てたのである。楊子敬は父親・謝葆璋の手伝いとして煙台に来たのだが<sup>36)</sup>、仕事の終わったあと氷心たちに『三国志』の話を読み聞かせてやっていた。ところがだんだん仕事が忙しくなって読み聞かせてやれなくなったので、氷心は自分で『三国志』を手に取り、読み出したのである。そこで、『三国志』の続きを読みたいために、少しでも多くの文字や知識を広げようと、今まで熱心でなかった昼間の塾での勉強も熱心にやり出した、という。

それまでの煙台での氷心は、先に述べたように馬にも乗り、鳥打銃とはいえ銃を持ち、その銃を撃つことさえ出来る、男勝りの子供であった。それは一言で言えば「野ye」の性格であったことになるが、「野」というのは、野性的とか野蛮ということではなく、正規、正常ではないという意味に違いない。

氷心は7歳から勉強し出したと言っても良いが、まだそれは自己流であった。そのことを指摘し、氷心に詩作を教えたのは、次に来た先生であるが、それはまた、旧式の塾の伝統から、「女四書」なども教える先生でもあったに違いない。

氷心は、10歳の時、おじさんの王夆逢に教えられることになった。楊子敬が忙しかったからである。

十岁的时候，我的表舅父王夆逢先生，从南方来。舅舅把老师的职分让给了他。第一次他拉着我的手，谈了几句话，便对父亲夸我“吐属风流”。——我自从爱看书，一切的字形，我都注意。人家堂屋的对联；天后宫，龙王庙的匾额，碑碣；包裹果饵的招牌纸；香烟画片后面，格言式的短句子；我都记得烂熟。这些都能助我的谈锋。——但是上了几天课，多谈几次以后，表舅发现了我的“三教九流”式的学问；便委婉的劝诫我，说读书当精而不滥。于是我的读本，除了《国文教科书》以外，又添了《论语》，《左传》，和《唐诗》。（还有种种新旧的散文，旧的如《班昭女诫》，新的如《饮冰室自由书》。）直至那时，我才开始和经诗接触。<sup>37)</sup>

35) 同注2「我的文学生活」4頁

36) 楊子敬は会計を担当した。

37) 同注2「我的文学生活」6～7頁



ここで冰心が回想しているのは、文字が好きだということで竜王廟の対聯だとか、キャンデーの包み紙の文字やタバコの宣伝のカレンダーに書いてある格言などを片端から覚えたことである。そして文字を知っていることで幾らか得意になっていたことである。しかし、こういうことは冰心の頭の優秀さを示すかもしれないけれど、正規の授業を受けてこなかったことも露呈していたのである。アトランダムな知識を入れただけの系統だっていない知識を王聳逢先生から指摘された衝撃がここには書かれている。これまでの勉強を「三教九流」式（雑多で雑駁なこと）の学問とへりくだって言わざるをえなかったところにそれが表れている。これはまさに「野ye」であったこれまでの態度の欠陥の指摘であろう。「野ye」からの脱却を意図する冰心の勉学に『班昭女誡』が加わったこと、言うまでもあるまい。

楊子敬が冰心に教えたり、話をしてやることができなくなったのは、父親の仕事を手伝う忙しさだけではなく、楊子敬が中国同盟会の会員であったことから来る忙しさもあったようだ。

舅舅是老同盟会会员。常常有朋友从南边，或日本，在肉松或茶叶罐里，寄了禁书来，如《天讨》之类。我也学着他们，在夜里无人时偷看。渐渐的对于国事，也关心了，那时我们看的报，是上海《神州日报》，《民呼报》。<sup>38)</sup>

「舅舅」すなわち楊子敬は、中国同盟会の会員であって、南方や日本から「肉松」（肉のでんぶ）や「お茶の葉」の缶に入れられて送られてくる禁書や『天討』のやり取りをしていたのである。同じ楊の姓であるから勿論、母親と一族である。母親の兄弟であって、煙台でも、のちの北平でも冰心の教育面で大きな影響を与えた人物である。

冰心の別の回想では、次のようなことも言っている。

小舅舅每次来过暑假，都带来一些书，有些书是不让我们看的，越是不让看，我们就越想看，哥哥们就怂恿我去偷，偷来看时，原来都是“天讨”之类的“同盟会”的宣传册子。我们偷偷地看了之后，又偷偷地赶紧送回原处。<sup>39)</sup>

ここに言う「小舅舅」は楊子玉のことである。同じく楊一族の楊頌岩の息子である。彼は唐山路銘学堂で勉強しており、夏休みになると煙台に来た。冰心たち子供達はこの叔父さんが大好きであった。というのも、良く話をしてくれたからだ。

小舅舅是我们这一代最受欢迎的人，他最会讲故事，讲得有声有色，他有时讲吊死鬼的故事来吓唬我们，但是他讲得更多的是民族意识很浓厚的故事，什么洪承畴卖国啦，林则徐烧鸦片啦等等，都讲得慷慨淋漓，我们听过了往往兴奋得睡不着觉！<sup>40)</sup>

38) 同注2「我的文学生活」6頁

39) 同注5「我的童年」73頁

40) 同注5「我的童年」72頁

楊子玉は子供達に民族意識濃厚なお話をしたという。売国奴とされている洪承疇（彦演、1593～1665）は、明の大臣であったが清に降伏して、清に抵抗する明の文人たちを弾圧したことで有名である。林則徐（少穆、1785～1850）は言うまでもなく阿片を焼却した人物である。この2人とも福建の出身であり、特に林則徐は侯官県の出身であった。子供達は叔父さんの話に興味して眠れないほどであったという。先の例にあるように、そのおじさんたちが持ってきて何かを読んでいることを知った子供達は、その本をこっそりと盗み出して読んだと言う。それが『天討』などの宣伝冊子であったと言うが、清朝の水兵の学校の校長が、排満興漢を標榜する「同盟会」の会員と関係あることや、その宣伝誌を隠し持っていることは由々しきことであったに違いない。

氷心が読んだと言う『天討』とは、章炳麟（枚叔、1869～1936）が編集したもので、同盟会の機関紙『民報』の臨時増刊として、1905（光緒31）年に刊行された。その目次は次のようなものである。

1. 討満洲檄 2. 普告漢人 3. 四川革命書 4. 四川討満洲檄文 5. 江蘇革命書
6. 河南討満洲檄 7. 安徽討満洲檄 8. 直隸省宣告革命檄 9. 山東省討満洲檄
10. 廣東人對於光復前途之責任 11. 雲南討満洲檄 12. 諭保皇会檄 13. 諭立憲黨<sup>41)</sup>

今、この第1の軍政府が発した「討満洲檄」を見てみるならば、以下のような文章である。

天運丁未紀元四千六百零五年 月 日，中華國民軍政府檄曰。昔我皇祖黃帝軒轅氏，與炎皇同出于少典之裔，實建國于茲土。（中略）爲始于内外民猷，四萬萬人，契骨爲誓曰：《自盟以後，當掃除韃靼，恢復中華，建立民國，平均地權，有渝此盟，四萬萬人共擊之。》（以下省略）<sup>42)</sup>

長いのでごく一部を見るだけにとどめる。紀元4605年と言い、「中華國民軍政府」を称して、「皇帝軒轅氏」まで持ち出している。極めて国粹的な檄文である。したがって「韃靼」（蒙古族をさして言う）を排除して、「中華」を回復せよと言っている。このような檄文を10歳ぐらいの氷心が読んだということである。

なお、『神州日報』は上海で1907（光緒33）年に、于右任（名が伯循、1879～1964）や楊篤生（名が毓麟、1872～1911）らが編集して出版した新聞である<sup>43)</sup>。また、『民呼報』は同じく上海で1909（宣統元）年に于右任が主編して出版された。しかし、官界を攻撃したことで于右任

41) 張静廬編『中国近代出版史料』二編（群聯出版社 1954年5月）144頁

42) 沈雲龍主編『近代中国史料丛刊』第91辑 文海出版社

43) 同注41 280頁

は拘禁され、追放となり、僅か93日間出版されただけの新聞であった<sup>44)</sup>。

1909（宣統元）年、海軍準備大臣・載洵が煙台海軍学堂を視察に来た。学堂がかなりうまく運営されていることにより、20名の満族貴族の子弟を学堂に入学させた。彼らの傲慢な態度が漢族の反抗意識を刺激し、双方にしょっちゅう摩擦が起きた。1910（宣統2）年春の運動会の錦の御旗争奪の競技で、日ごろの鬱憤が爆発して衝突する事件となった。清朝政府は海軍部官員・鄭汝成（子敬、?～1915）を派遣して調査することにした。鄭汝成と謝葆璋とは天津水師学堂の同期生であった。鄭汝成はこう言った。煙台海軍学校の進歩的な活動はすでに清朝政府から目を付けられている。謝葆璋のことを「反逆者だ」と言う者までいる。今のうちに身を引いて、査問検査などを受けて、免職にならぬほうが良い、と<sup>45)</sup>。

謝葆璋はこの忠告を受け入れて辞職した。1911（宣統3）年秋、謝葆璋一家は船に乗り、煙台から上海に着き、虹口に住んだのであった。ここで、冰心は辛亥革命の報に接し、みずから義捐金を送っている。

这时大家都纷纷捐款劳军，我记得我也把攒下的十块压岁钱，送到申报馆去捐献，收条的上款还写有幼女谢婉莹君字样。<sup>46)</sup>

冰心によれば、黎元洪（宋卿、1864～1928）の名義の辛亥革命の電報が新聞に載ると、大勢のものが義捐金に応じたと言う。冰心自身も11歳でそれまでに貯めた「压岁钱」（お年玉）を寄付したと言う。10元である。

したがって、冰心の家塾での読書も、先に挙げたように伝統的な女子教育のテキストである『班昭女誡』も加わったかもしれないが、1898（光緒24）年の戊戌の変法に失敗した梁啓超（卓如、1873～1929）の著作『飲冰室自由書』などが加わっていたのである。

（还有种种新旧的散文，旧的如《班昭女誡》，新的如《饮冰室自由书》。）<sup>47)</sup>

新しい時代が押し寄せて、「女四書」に代表される封建思想も、伝承されることが難しくなったと言っても良い。それはまた、科挙が廃止され新しい制度として学校と言う制度が普及してくるからであるが、それについては、今回は述べない。

上海から福州に戻った冰心は、1912（民国元）年の秋、12歳で福州女子師範予科に入り、数学を初めとする初歩的な科学に接触することになるのであった。

44) 張静廬編『中国近代出版史料』初編（上雑出版社 1953年10月）88頁

45) 唐宏、王紅「讓大海為歷史作証——海軍名宿謝葆璋的一生」（『人物』1989年第1期）。なお、注14に挙げた拙論「冰心の父親について——その2」も参照されたい。

46) 同注5「我的童年」74頁

47) 同注37

## おわりに

家塾というものがいつまで維持されて継承されたかについては、明確に言うことはできない。ただし、もともと科挙合格のために強化されていった家塾であったから、1905（光緒31）年に科挙が廃止されてから急速になくなっていったと思われる。そして、おおよそ中華民国になって学校制度が普及し出すにつれて、家塾は学校に取って代わられたと言っても良いであろう。

冰心の回想によれば、冰心が福州女子師範予科に入った時、祖父である謝鑾恩が次のように言ったと言う。

他忽然摸着我的头说：“你是我们谢家第一个正式上学读书的女孩子，你一定要好好地读呵。”<sup>48)</sup>

「お前は謝の家で最初に正式な学校に入った子だ、しっかり勉強するのだぞ」と言った塾の先生であった謝鑾恩の感慨が、このことばの中に込められていよう。

しかし強調しておきたいのは、女子についてはほとんど教育が無視されて、「女子才無ければ便ち是れ徳」<sup>49)</sup>と言われたように、女子には知育としての教育が施されなかったような印象があるが、実は少なくとも10歳ぐらいまでは家塾で、男女同学で文字習得の基本と、良妻賢母になるべく道徳の教育がなされていたのである。冰心は、まさにその制度に順応して育ったといえる。冰心の回想によれば、文字という鍵を知った彼女は以後、商務印書館より出版された説部叢書をすべて読んだと言う。

于是旧小说，新小说，和报纸，同时并进。到了十一岁，我已看完了全部“说部丛书”，以及《西游记》，《水浒传》，《天雨花》，《再生缘》，《儿女英雄传》，《说岳》，《东周列国志》等等。<sup>50)</sup>

説部叢書は、1903（光緒29）年から1924年まで出版された。第1期10集92種と、第2期4集322種の2種類が出された。説部とは小説、筆記、雑著などを指して言う。第1期は新小説が流行り出した最初の小説叢書で、同名の叢書が他の出版社からも出されたが、商務印書館のものだけが出版社の名前を冠しないで「説部叢書」とのみ言う。商務印書館からはそのほか『林訳小説叢書』が出ている。11歳までに冰心は「説部叢書」を全部読んだと言うが、これは少し

48) 同注17「我的故郷」13頁

49) 陳繼儒『宝顔堂秘笈 安得長者言』（巖一萍選輯『原刻景印 百部叢書集成』芸文印書館）のことば。注33に挙げた山崎純一『教育からみた中国女性史資料の研究』2頁に指摘あり。

50) 同注2「我的文学生活」6頁

オーバーであろう。

ただし、この回想から読み取れるのは、家塾で得た知識を家庭内で陰湿に良妻賢母の思想として培養する娘の姿ではなく、古今東西の書物を通じて新たなる知識を貪欲に吸収していく少女の姿であろう。新しい世界への飛躍が女子にも許されていく時代の姿とあいまって、それに呼応する女性が出てきたことを感じさせるとも言えよう。

〔補足〕

原稿提出後、たまたま馮夢龍編『警世通言』第23巻「楽小舎拼生冤偶」を読んだ。話の舞台は南宋の臨安府（杭州）であった。主人公・楽和は幼いころ同じ塾で勉強した1歳年下の喜順娘が忘れられず、銭塘江の逆潮の際、死を賭して流された彼女を救い、結婚できるという話であった。この話に、「附在間壁喜将仕館中上学」とか「兩個同学讀書」と出てくる。さらに、「楽和到十二歳時、那時楽和回家、順娘深閨女工、各不相見。」とも書かれている。つまり、楽和は、喜将仕（9品官、最も低い文官）の館に設定された塾で勉強したこと。また、男女共学であったこと。順娘は11歳で家に籠もり、女工（女子のたしなむ仕事）をしたこと、などがわかる。以上は、『清俗紀聞』に述べられている女子教育にそのまま当てはまる。少なくとも明代の馮夢龍（1574～1646）が編纂した時から、家塾があって運用されていたことがわかった。

(2009. 1. 15)